

ムラサキシジミは♂♀ともに翅表に明るい青紫色の鱗粉を配し、太陽光線を受けながら木々の葉っぱ上で思いっきりその美しい色をみせてくれる、暖地性のシジミチョウです。現在知られる北限の採集記録は宮城県となっています。南は沖縄、八重山諸島でもみられますが、私の経験では加古川市志方町の岩山で発生するムラサキシジミが異常に大型である印象です。高知市五台山産との大きさの違いがわかるように標本写真を添付します。♂は紫色が羽全体に均一に広がり、♀では前翅で明らかに♂とは異なるくびれ部分があって色調も明るい青紫



May 30, 1971 高知市五台山 ムラサキシジミ♂



June 5, 2008 加古川市志方町 ムラサキシジミ♀

であることから雌雄の判別は容易です。幼虫は通常、アラカシ、アカガシ、シラカシ、イチイガシなどのカシの仲間を、好んでヒコ生えなどの新芽を食べ、葉っぱを筒状に巻き込んだ目に付きやすい巣をつくってその中に潜むので見つけるのが簡単です。カシ類の新芽が少なくなる夏季にはコナラやクヌギ、ミズナラなども食べるのですが、加古川市志方町岩山産が特に大型であるのは、幼虫時代の食性と関係があると考えられます。ムラサキツバメもそうですが、わらじに似た形態の幼虫のまわりにはアリがうろうろしています。というのは幼虫が蜜腺をもっていてそこから甘い蜜を分泌し、それをアリがなめにくるのです。シジミチョウの仲間にはアリと完全に共生するものもいて、蜜で誘惑してアリに巣まで運んでもらい、密かにアリの卵や幼虫を食って育つ、まさに肉食のチョウ：ゴマシジミもいますが、ムラサキシジミはあくまでカシ類の葉っぱを食べて育ちます。つまり、ムラサキシジミが

蜜を出してアリがそれをなめることがムラサキシジミにとっていったいどういう意味があるのか、実際にアリの存在なしで正常に生育したという実験例もあり、蜜を分泌するという習性はまるで意味のないことのように思えてしまいます。野外では落葉のあいだにもぐりこんで蛹になるらしく私はまだ自然界で蛹を見たことがありませんが、飼育中に蛹に触れるとムラサキツバメでも同様に「さわらないで」といいたいのか「チッチッチッ」と音をだします。なぜこのような音を出すのか詳細はわかりません。

ムラサキシジミもチョウのまま越冬しますが、ムラサキツバメのような集団をつくることはなく、例えばビワの葉っぱのあいだで1頭きりで寂しく冬をしのぐ姿を観察したことがあります。このチョウの裏面はムラサキツバメもそうですが灰褐色に斑点模様があって、羽を閉じてとまっている姿は枯葉にも似ており、その居場所によっては一種の擬態効果を発揮します。

松波町では自動車道路沿いに植栽されたカシ類の街路樹がヒコ生えを出している時期に、どこから飛来したのかムラサキシジミの♀がその若葉に産卵しようとしている場面に出くわしたことがありますが、そのときは結局産卵することなく飛び去ってしまいました。普通は、直射日光が当たることの少ない林縁のカシ類を好む傾向があり、松波町の現在の街路樹環境はムラサキシジミには不相当と判断されたのかと思ったのですが、うれしいことに2009年



3月18日に越冬後のきれいな♀、翌日には♂が全く同じ人家垣根で日向ぼっこをする場面に出会えました。こんなにきれいなチョウが身近にいてくれるとうれしくなります。